

研究授業のすすめ

1. 研究授業は、授業力を伸ばす絶好のチャンス。

- ・教師の生命線は授業力。 授業力を高める努力を怠らないこと。
- ・授業力を高めるには「どれだけ研究授業を行ったか」である。 最低でも年に1回はしたい。
- ・授業を見てもらい、批評してもらい、そして力がつく。見てもらわないと授業は上達しない。
- ・授業力に終点はない。退職するまで勉強する教師に！
- ・授業力のある教師は、子ども理解も学級づくりも優れた教師になっている。
- ・子どもが荒れるのは授業がおもしろくないから・・・そして中学生は教室から出ていく。
- ・研究授業で指導案を練るからこそ、授業のつくり方や指導案の書き方がうまくなる。

2. 研究授業の教科と時期。

- ・校内で決まっていればその教科でいいが、決まっていなければ自分の好きな教科を試してみる。
- ・いろいろな教科をやりながら、最終的には自分の得意教科をもてるようにする。
- ・時期の考え方はいろいろあるが、1学期はアッという間に終わってしまうので、2学期か3学期にすれば、それに向けて計画をたてて取り組める。(それだけ長い間プレッシャーはかかるが・・・)

3. 授業研究会の持ち方。

- ・「切磋琢磨」 こういう研究会でありたい。アカンところはアカンとはっきり言える研究会にする。傷のなめ合いの研究会では力はつかない。(授業の下手な先生に子どもはついてこない)
- ・授業のうまい先生の発言はメモをとる。あーこんな所を見ていたんだと授業の見方の参考になる。
- ・授業研究会は司会者にかかっている。今日は〇年が司会、と輪番制にしていこううまく進まない。「まずは授業者からどうぞ、次は一人ひとり感想を述べてください・・・」こんな進め方は最低。テーマを決めて、焦点を絞って、内容の濃い討議にする司会者が必要。
- ・若手が発言する研究会は、活気が出てくる。そして基本的なことも再確認でき、どう改善していけばいいかわかりやすくなる。若手が発言することによって、ベテランの力も伸びる。

4. 研究授業その他あれこれ・・・

- ・参観者の椅子は、教室の横側に並べて子どもの表情もみてもらう。本当は立って見る方がいい
- ・教室のそうじはきちんとする。汚い教室の教師の授業は、なぜかよくないことが多い。
- ・研究授業を見に行く時はその教室に5分前に入っておく。自分の学級の自習は早めに準備する
- ・隣のクラスで試しの授業をするのは、あまり意味はない。だって子どもが違うのだから。
- ・いい授業を何度も見て、自分用に加工していく (いい授業は何があっても見に行くこと)
- ・たかが指導案、されど指導案。指導案をしっかり書ける先生は、授業は必ず上達する。

5. 研究発表会をする学校に。

- ・研究発表会の経験を積むと力がついていく。多くの人に見てもらい、教えてもらういい機会。
- ・研究発表会をすると忙しくて子どもと遊べないというのは、逃げの言い訳。そんな先生に限って子どもと遊んでいない。研究発表会の準備等で忙しくなるのは確か。でもそこで授業力が高まれば、必ず子どもに還元できる。(1年中忙しいのではない、忙しい時期はある期間だけ)
- ・研究指定を受けると予算もつく。学習環境も整う。目標も出来る。職員もまとまる。力もつく。
- ・研究発表をしよう！研究指定を受けよう！と声のあがる学校にしたい。若手教師から声をあげよう。

6. 「あの先生の授業を見たい」

- ・そう思ってもらえるような先生になれるように、日々がんばっていきたい。